

Teaching Portfolio 2016

【第5稿 (2016年8月30日更新版)】



着任後はじめて研究室に所属された5名の卒業時の写真(上)と、それを2年4ヶ月後の来訪時に再現した写真(下)

第15回 佐賀大学 ティーチング・ポートフォリオ・ワークショップ

2016年8月20日(土)~22日(月)

佐賀大学農学部応用生物科学科

徳田 誠

tokudam@cc.saga-u.ac.jp

目次

1. 教育の責任.....	1
2. 教育の理念と目標.....	2
2.1. 学生に求める能力と目指すべき人間像.....	2
2.2. 学部低年次の学生に対する教育の理念と目標.....	2
2.2.1. 主体性と積極性を持って物事に取り組む姿勢を身につける.....	2
2.2.2. 「強さとしたたかさを備えた人間」になる.....	3
2.3. 学部高年次の学生に対する教育の理念と目標.....	3
2.3.1. 探求する喜びを感じ、論理的思考と建設的議論ができるようになる.....	3
2.3.2. 「打てば響くような」人間になる.....	3
2.4. 修士課程の学生に対する教育の理念と目標.....	3
2.4.1. 自ら研究を遂行でき、社会的・協調的な行動がとれるようになる.....	3
2.4.2. 「頼り甲斐のある」人間になる.....	4
2.5. 博士課程の学生に対する教育の理念と目標.....	4
2.5.1. 国際的な視野に立って組織を活かした研究を遂行できるようになる.....	4
2.5.2. 「他者を幸せにできる」リーダーになる.....	4
3. 教育の方法.....	4
3.1. 学部低年次の学生に対する教育方法.....	4
3.2. 研究室に所属する学生に対する教育方法.....	5
3.2.1. 目的意識向上のための研究室のモットーの提示と徹底.....	5
3.2.2. 積極性と主体性を維持・増進するための研究課題の設定.....	6
3.2.3. 研究能力向上のための卒論・修論のマンツーマン添削.....	6
3.2.4. 研究能力向上のための月例個別ミーティングの開催.....	6
3.2.5. 研究能力と社会性向上のための研究室内チューター制度の導入.....	6
3.2.6. リーダーシップの育成と協調性を養うための総括選挙と係の割り振り.....	7
3.2.7. モチベーションの維持と向上をはかるための学生間投票と表彰制度.....	7
3.2.8. 目的意識との社会性向上のための同窓会とオープンセミナーの企画.....	7
3.2.9. 社会性・協調性を身につけるための身障者就労支援組織からの実習生受け入れ.....	7
4. 教育を改善するための努力.....	8
4.1. 学部低年次の学生に対する教育の改善努力.....	8
4.2. 研究室に所属する学生に対する教育の改善努力.....	8
5. 教育の成果・評価.....	8
5.1. 学部低年次の学生に対する教育の成果と評価.....	8
5.1.1. 学生による授業アンケートの結果および授業全体を通しての感想.....	8

5.1.2. 研究室に所属する学生の増加	9
5.2. 研究室に所属する学生に対する教育の成果と評価	9
5.2.1. 学会発表と論文発表	9
5.2.2. 学生の受賞およびプレスリリース	9
5.2.3. 卒業した学生との交流	10
6. 今後の目標	10
6.1. 短期的目標	10
6.2. 長期的目標	10

※添付資料・参考資料

- (1) オンラインシラバス
- (2) 授業での配布資料例
- (3) 研究室の歴代総括（学生代表）および係のリスト
- (4) 九州昆虫セミナー開催リスト
- (5) 学生による授業評価アンケート結果
- (6) 研究室の学生による学会発表リスト
- (7) 研究室の学生が第1著者の論文業績およびその他の著述リスト
- (8) 大学広報誌「かちがらす」での学生の研究活動報告

1. 教育の責任

私は農学部応用生物科学科に所属し、学部および修士課程の学生の教育・指導を担当している。また、鹿児島大学大学院連合農学研究科の博士課程の学生の教育・指導も担当している。

応用生物科学科においては、4年間の教育課程を通して**高い倫理観と豊かな人間性**を育み、社会生活で守るべき規範を遵守し、自己の能力を社会の健全な発展に寄与しうる姿勢を身に付けることを目指している。

農学研究科（修士課程）においては、**自ら課題を発見し、その課題を解決する能力を身につける**ことを最大の目標として掲げ、社会に即応できる高度な専門職業人の養成を目指している。中でも私の専門である生態学や昆虫学の分野で、先端的・応用的・実用的な能力を発揮できる高度な専門職業人の養成を目指している。鹿児島大学大学院連合農学研究科では、研究者、技術者、教育者として「**進取の精神**」に溢れる**リーダーの育成**を目指している。

これらを教育の責任を果たすため、以下のような授業科目を担当している（添付資料1も参照）。

・佐賀大学農学部（2014年度～2016年度前期）

科目名	対象学年	種別・特徴・期間	開講年度・学期	受講者数
生物学／生物学概論Ⅰ	学部1年	選択・教養・半期	2015・前期	約100名
大学入門科目	学部1年	必修・基礎・半期	2015・前期	約45名
インターフェイス・食料と生活Ⅱ	学部1年	選択・教養・半期	2015～2016・前期	約40名
応用動物昆虫学	学部1年	必修・専門・半期	2014～2016・後期	約70名
生物学実験	学部2年	必修・実験・半期	2014～2016・前期	約45名
応用生物学実験	学部2年	必修・実験・半期	2014～2016・後期	約45名
システム生態学	学部2年	選択・専門・半期	2014～2016・前期	約110名
生態学実験Ⅰ,Ⅱ	学部3年	選択・専門・(各)半期	2014～2016・前後期	約5名
科学英語	学部3年	必修・専門・半期	2014～2016・前期	約5名
生物科学英語	学部3年	必修・専門・半期	2014～2016・後期	約5名
卒業研究	学部4年	必修・専門・通年	2014～2016・通年	約5名

・佐賀大学大学院農学研究科（2014年度～2016年度前期）

科目名	対象学年	種別・特徴・期間	開講年度・学期	受講者数
農学総合講義	修士1年	必修・基礎・半期	2014～2015・前期	約40名
応用生物科学特論	修士1年	選択・オムニバス・半期	2016・前期	約30名
システム生態学特論	修士1年	選択・専門・四半期	2014～2016・後期	約10名
進化生態学特論	修士1年	選択・専門・四半期	2014～2016・後期	約10名
生物資源制御学演習Ⅰ	修士1年	選択・専門・通年	2014～2016・通年	約3名
生物資源制御学演習Ⅱ	修士2年	選択・専門・通年	2014～2016・通年	約3名
特別研究	修士2年	必修・専門・通年	2014～2016・通年	約3名

このほか、留学生を対象とした科目として、学部では『General topics of applied biological sciences (学部1年; 選択・オムニバス・半期; 2014~2015年度・後期)』、修士課程では『Advanced Community Ecology (修士1年; 選択・専門・四半期; 2016年度・前期)』を担当し、連合農学研究科博士課程では『生物環境保全科学特別講義 (博士課程; 選択・オムニバス・半期; 2014年度・前期)』などを担当した他、博士課程の大学院生の主指導教員および副指導教員として、日々研究指導および研究室運営にあたっている。

2. 教育の理念と目標

私の教育の理念は、**人生のあらゆる局面において、周囲の信頼に応えられる実践力・課題解決能力と、周囲を幸せにできる人間力・総合力をもつ人材を育成すること**である。

2.1. 学生に求める能力と目指すべき人間像

上述の教育の責任を踏まえ、学生に目指してほしい人間像とそのため求められる能力、および私自身が実践している教育研究活動をまとめると、以下の表ようになる。

年次	目指す人間像	求められる人間性と能力	求められる研究能力	関連する主な教育研究活動
博士課程	周囲から信頼され、 他者を幸せにできる人間	リーダーシップ 人間力	研究統括力 国際的発信力	博士論文 対外交渉 国際会議 研究室運営
修士課程	他者に配慮ができ、 頼り甲斐のある人間	社会性 協調性	研究立案能力 課題解決能力	特別研究 共同研究参画 原著論文執筆 研究室運営
学部 高年次	他者を理解し、自らの考えを伝えられる 打てば響くような人間	理解力 表現力	論理的思考力 建設的議論力	卒業研究会発表 学会発表 分野実験 論文講読
学部 低年次	社会で生き残るための 強さとしたたかさを備えた人間	積極性 主体性	当該分野の 基礎知識および 意義の理解	教養科目 基礎科目 専門科目

2.2. 学部低年次の学生に対する教育の理念と目標

学部低年次の学生には、**積極性と主体性**をもって教養科目、基礎科目、専門科目の授業や生物学実験・応用生物学実験を受講することにより、農学および生態学・昆虫学関連分野に関する基礎知識やこれらの学問分野の重要性、面白さといった**研究の意義を理解**してもらいたい。そして、社会で生き残ることができる**強さとしたたかさを備えた人間**になってほしいと考えている。

2.2.1. 主体性と積極性を持って物事に取り組む姿勢を身につける

現代の日本では、就学できるということがごく当たり前になっており、**学べる事の幸せ**を感じられる機会が少ないように感じている。私は何よりもまず、学生が、教えられている、覚え

させられているという感覚ではなく、自ら当該分野を学んでいるという**積極的・主体的な意識**をもって授業に取り組んでほしいと考えている。

2.2.2. 「強さとしたたかさを備えた人間」になる

自然界の厳しきや生物たちのしたたかさを学ぶことによって**真実を見抜く洞察力を養い、人間社会の中でたくましく生きるためのヒントを得てほしい**。また、様々な生物が織りなす生命の営みの素晴らしさを感じるにより、社会の中で暮らす**自分自身の存在価値を見つめ直す**とともに、自分にとっての生き甲斐が何かを考えてほしい。

そして、私が担当する一連の授業を通じて、これらの分野に興味を持ち、真摯に取り組んでみたいと考える学生がいれば、私の研究室への分属を希望してもらいたい。

2.3. 学部高年次の学生に対する教育の理念と目標

研究室に分属された学部高年次の学生には、卒業研究や学会発表、分野実験（生態学実験）、論文講読を通して、**論理的な思考や、建設的な議論ができる人間**へと成長してほしい。そして、様々な物事に取り組む際に、**打てば響くような対応ができる人間**に育ってほしい。

2.3.1. 探求する喜びを感じ、論理的思考と建設的議論ができるようになる

一連の調査、実験、データの取りまとめと解析の作業を通じて、学生には**未知の課題を探求し解明する喜び**を感じてもらいたい。さらに、研究室ゼミでの発表やと議論、国内外の学術会議における発表と質疑、原著論文や卒業論文の執筆を通して、自身の考えを的確に他者に伝え、他者の考えを（同意しなくともよいが）理解できる人間になってほしい。

2.3.2. 「打てば響くような」人間になる

研究活動に携わっていると、予定通りに物事が進まないことや失敗をしてしまうこと、突発的に何か取り組まなければならないことなど、即応性が要求される場面に直面する。「すぐにこれをしなきゃ!」、「よし、じゃあこうしようか!」と言った場合に「はい!」、「やらせて下さい!」と前向きな姿勢で取り組める、いわば**「打てば響くような」人間**になってほしい。

2.4. 修士課程の学生に対する教育の理念と目標

修士課程の学生には、自身の研究活動に加え、共同研究への参画、原著論文の執筆、研究室運営への参加を通して、**研究立案能力と課題解決能力**とともに、**社会性と協調性**を身に付け、他者に対する適切な配慮ができ、周囲から頼られる人間へと成長してほしい。

2.4.1. 自ら研究を遂行でき、社会的・協調的な行動がとれるようになる

修士課程になると、学会発表も何度かこなし、英文学術論文も読みこなせるようになり、**研究の進め方が自分なりに理解できる**ようになるものと期待される。また、自身の研究課題と関連

する後輩のサポートをする機会や、研究室で取り組んでいる共同研究に参画する機会もある。こうした経験の中で、研究を自分一人で進めるだけでなく、**社会性と協調性**を養って、様々な人と協力して物事に取り組めるようになってほしい。

2.4.2. 「頼り甲斐のある」人間になる

研究室の中で後輩が多くなってくると、同輩や後輩たちと一緒に研究室のイベントや調査・実験に携わる機会が増えてくる。そして、学部生の頃に大学院生の先輩から教えてもらったことを、今度は自分が後輩に教える立場となる。そして様々な場面で**バランス感覚を持って他者に対する配慮をすることが必要**となる。そして、**後輩や同輩からみて頼り甲斐のある存在**へと成長してほしい。

2.5. 博士課程の学生に対する教育の理念と目標

研究室に所属している博士課程の学生には、博士論文の作成や外部の研究協力者との様々な交渉、国際会議での発表や学生の取りまとめ役としての研究室運営への参加を通して、研究者として**研究を統括する能力と国際的な発信力**を身に付けるとともに、**高い人間力**を備えて周囲から厚く信頼され、**他者を幸せにできるようなリーダー**へと成長してほしい。

2.5.1. 国際的な視野に立って組織を活かした研究を遂行できるようになる

博士課程になると、すでに原著論文の執筆から査読者とのやり取りを経て出版に至る一連のプロセスを経験していることが期待される。また、国際会議への積極的な参加により、当該学問分野に関する英語での議論ができるようになってほしい。さらに、外部の研究協力者と様々な交渉をしながら研究を進める場面も多くなってくる。こうした経験を通じて、**国際的な視野に立って研究に取り組むこと**、そして、**組織的な研究を統括できる能力**を身に付けてもらいたい。

2.5.2. 「他者を幸せにできる」リーダーになる

博士課程まで進学すると、研究室では年長の立場となり、様々な場面で学生の代表としてリーダーシップを発揮する必要性が生じてくる。ここで言うリーダーシップとは、研究室の他のメンバーの気持ちを誰よりも理解して行動し、周囲から信頼される人間になること、そして、メンバーにとって何が最善かを常に考慮に入れた上で、進むべき道筋をメンバーに示すことができる人間になることである。究極的に言えば、**高い「人間力」**を有しており、その組織に所属している**他者を幸せにすることができる人間**のことである。

3. 教育の方法

3.1. 学部低年次の学生に対する教育方法

学部低年次の学生に対する教育のポイントは、授業を積極的・主体的に受ける環境を整えることと、当該分野の基礎知識と研究の意義を理解してもらうことである。そして、社会で生き

抜くための「強さとしたたかさを備えた人間」になってもらうことを意図している。この目的を達成するため、以下の方法を実践している。

(1) 学生に提示する資料は教科書的な知識の羅列とはせず、**現在私が実際に取り組んでいる研究内容**などを含めて、当該分野の面白さや意義を伝えるべく配慮する。

(2) 学生の身近で**最近起こっている出来事や世間で注目されている出来事**をその日の授業内容と関連させて導入部分に用いることにより、積極的な学修意欲を高めるよう配慮する。

(3) 授業への主体的な参加意識を高めるため、2回目以降の授業では、理解を深めるため**前回の授業のエッセンスを復習**するとともに、前回の授業の際に集めた**学生の質問やコメント、それに対する教員の回答を次回の授業の冒頭で紹介**する。

(4) 話を聞き逃す学生がでないように、パワーポイントでの説明中は教員の説明に集中してもらい、**説明後にパワーポイントの内容をまとめた資料を配布**する。

(5) 授業に積極的に参加する意識を持たせるため、**クイズ形式やコラム形式の話題を中盤に盛り込み**、知識の増加を兼ねる形で集中力の維持に配慮する。例えば、「ハンディキャップ理論」を説明する際、「いまあなたは、ある組織から狙われている。そこで、1人だけボディーガードを雇うことにした」という設定で、バーベルを持ち上げている人と単に手を上げている人のシルエットを提示して、どちらをボディーガードに雇いたいのか挙手で答えてもらってから理論の説明をしている(添付資料2)。

(6) 学生の理解度を把握しつつ積極的な姿勢で授業にのぞんでもらうため、**授業の最後に小レポート課題を課し、質問や感想を書いてもらう**。また、自身の力で考えて解決する能力を身につけてもらうため、小レポート課題は正答が1つとなるような内容ではなく、学生が自分の考えをなるべく自由に書けるよう配慮している。例えば、植食者に対する植物の被食防御戦略について説明する授業では、「あなたの自宅を泥棒から守るための防御手段を挙げられるだけ挙げ、それは植物の防御戦術で言えばどれに相当するかを説明しなさい。」といった問題を課している(添付資料2)。

3.2. 研究室に所属する学生に対する教育方法

私は研究室に所属する学生に対して、上述したそれぞれの年次における教育理念と目標を達成するため、以下のような教育方法を実践している。

3.2.1. 目的意識向上のための研究室のモットーの提示と徹底

(1) 積極的に行動すること、(2) 物事を前向きにとらえること、(3) 協調性を養うこと、(4) 臨機応変に対応できる人間になること、(5) 皆で活気のある研究室にすること、の5つをモットーとして掲げ、常に意識させている。

このうち、(1)は研究室分属後も主体性と積極性を持って「強さとしたたかさを備えた人間」となることを、(2)「打てば響くような人間」になることを、(3)「頼り甲斐のある人間」になることを、(4)社会性を持った人間になることを、(5)リーダーシップとメンバーシップを持

つことを意識した事項である。

3.2.2. 積極性と主体性を維持・増進するための研究課題の設定

本人の興味や将来の希望、性格や特徴などに応じて本人に合わせた研究テーマを各自に設定し卒業研究や特別研究に取り組んでもらう。その際、自身に取り組んでいる研究は、卒論や修論の単位取得のために必要なだけでなく、当該分野の発展に貢献できる内容であり、国内外の学会大会で発表することや、究極的には原著論文として公表することが重要であるという意識を植え付けている。そのため、意欲的な学生は学部3年生の頃から、他の学生も学部4年生以上からは毎年1回以上は学会大会で自身の研究成果を発表してもらっている。

3.2.3. 研究能力向上のための卒論・修論のマンツーマン添削

上記3.2.2との関連で、卒論・修論はすべて英語で執筆させている。これを確実に達成するため、最終学年の学生には、10月からの約5ヶ月、毎週1時間ずつの論文執筆時間を各学生に確保し、マンツーマンで論文の執筆をサポートしている。

3.2.4 研究能力向上のための月例個別ミーティングの開催

研究能力の持続的な向上をはかるため、すべての学生に対して、原則的に毎月1回1時間（3年生は30分）の個別ミーティングの時間を設定している。ミーティングでは、この1ヶ月のうちに取り組んだことやこれからの1ヶ月の間に取り組むことをワードファイルでまとめた資料を作成させて議論する。また、これを1年間継続することにより、その年度に何が進んで何が進まなかったか、目に見える形で把握できるように配慮している。

また、この時間は研究のことだけでなく、日々の生活や人間関係、就職活動や勉学についての悩みなど、何でも相談できるような雰囲気を作るように心がけており、学生の修学意欲やモチベーションを高め、かつ、保つようにも配慮している。

3.2.5 研究能力と社会性向上のための研究室内チューター制度の導入

研究室分属後、なるべく早い段階で学部生の論文読解能力を養うため、3年次には科学英語や生物科学英語の授業を通して、徹底的に科学論文の読解力をつけるようにしている。3年前期には少人数の授業で専門分野の洋書の一部を全訳し、夏休みから後期にかけては卒業研究の内容と関連の深い原著論文を全訳している。

また、後期の研究室ゼミにおいて、科学論文の内容を日本語で要約してレジュメを作成し、論文紹介として発表してもらっている。その際、3年生と研究分野がそれほど遠くない修士課程の院生にチューターを担当してもらっている。「最初のゼミ発表がうまくいかなかった場合にはチューターの責任」という認識で取り組んでもらう事により、院生には自身の研究分野と異なる論文を読む機会や、後輩からの質問に答える機会を通じて、自身の研究能力や社会性を向上させて欲しいと考えている。

3.2.6 リーダーシップの育成と協調性を養うための総括選挙と係の割り振り

主として大学院生のリーダーシップや人間力、社会性、協調性を養う目的で、毎年度初めに学生による「総括選挙」（＝学生代表を決める選挙）を実施し、得上位の学生3名に研究室の取りまとめ役を任せている。さらに、すべての学生に研究室の係を割り振り、研究室に所属して、研究活動に取り組んでいるという意識付けを行なっている（添付資料3）。

3.2.7 モチベーションの維持と向上をはかるための学生間投票と表彰制度

年度終わりには学生間投票により、新人王（新加入者でもっとも頑張った学生）、ベストサポーター（もっとも他者を助けた学生）、研究室 MVP（全メンバーの中でもっとも頑張っていた学生）を選び、最多得票者を表彰している。これにより、学生同士の協力意識や良い意味で適度な競争意識が芽生え、研究室内のモチベーションの維持・向上に繋がってほしいと考えている。

3.2.8. 目的意識との社会性向上のための同窓会とオープンセミナーの企画

各自の目的意識と社会性の向上のため、毎年1月下旬に同窓会を開催している。このイベントにより、OBやOGが研究室に訪訪して現役学生との交流をはかり先輩たちから学生時代のことや社会に出てからのことを学ぶことができ、学生の研究に対するモチベーションを高めたり、自分たちが社会に出たときの将来像を身近に感じてもらいたいと考えている。

さらに、2012年6月に九州大学や九州沖縄研究センターの昆虫研究者らとともに「九州昆虫セミナー」という国内外から研究者を招いてのオープンセミナー（公開講演会）を立ち上げ、2016年8月までの約4年間に九州各地で57回開催した。このセミナーにはこれまでにのべ1,700人以上が参加している。このうち佐賀大学では36回のセミナーを開催している（添付資料4）。

研究室の学生にこうしたイベントに参加してもらうことにより、幅広い知識を身につけるだけでなく、プレゼンの仕方を学んだり、研究が世界規模で展開されていることを体感したりという貴重な場になっているものと考えている。また、来訪した研究者と共に野外調査や実験に取り組んだり、自身の研究を紹介したり、懇親会で様々な物の見方や考え方を聞くといった様々な交流を通して、絶えず新鮮な刺激を受けながら、人間的に成長してほしいと考えている。

3.2.9. 社会性・協調性を身につけるための身障者就労支援組織からの実習生受け入れ

学生の協調性や社会性、人間力を高め、社会的弱者に配慮することができる人材を育成する目的で、2013年度には身障者の就労支援を目的とNPO法人と農学部との間で覚書を交わし、佐賀大学で初めての実習生を我々の研究室で受け入れ、文献データの入力作業に従事してもらった。

その後も随時実習生の受け入れを行なっている。こうした取り組みを通じ、学生たちの中で身障者と共働する雰囲気が生まれ、社会性が醸成されることを期待している。

4. 教育を改善するための努力

4.1. 学部低年次の学生に対する教育の改善努力

毎回の授業での学生の感想や質問を確認した上で、理解不足の面や誤解しやすい点があった場合にはその部分を重点的に取り上げて次回の授業に補足説明をすることにより当該授業が目的としている内容を確実に理解してもらうよう配慮している。

授業のマンネリ化を避けるため、必ず毎回、その年初めて追加する内容を含めるようにしている。これにより、絶えず授業内容を更新するのみならず、常に自分自身も新鮮な気持ちでテンションを高めて授業に取り組むことができる。

この他、前任地では「授業を活性化する科学実験ハンドブック」を分担執筆し(淵田ら, 2012)、佐賀大学着任後は学内外のFD研修、TPミニワークショップなどに積極的に参加し教育改善を心がけている他、H30年度に予定されている農学部の改組に関しては、大学院教育委員としての改組後のカリキュラム案の作成に中心的に携わり、農学研究科の教育改善にも貢献している。

4.2. 研究室に所属する学生に対する教育の改善努力

所属学生との月例個別ミーティングの際や共に野外調査や実験に取り組む際の会話の中で、それぞれの学生のモチベーションを確認し、適宜助言を与えている。

また、学会発表の練習や研究室ゼミでの発表、卒業論文や修士・博士論文の執筆を通じて、「求められる研究能力」を達成すべく日々研鑽している。

5. 教育の成果・評価

5.1. 学部低年次の学生に対する教育の成果と評価

5.1.1. 学生による授業アンケートの結果および授業全体を通しての感想

授業評価アンケート(添付資料5)の結果、「システム生態学」(2015年度)では、「授業に対する意欲や熱意が感じられたか」という質問について、当該授業の平均点は4.574と、学部平均4.194や全体平均4.180にくらべ非常に高く評価された。また、「この授業は全体として満足できるものだったか」に関しても当該授業の平均点は4.404で、学部平均4.101や全体平均4.120を大きく上回っていた。

さらに、2016年度の授業全体を通じた感想は、

- ・頭の整理がしやすく、とても勉強になる授業だった。
- ・講義の内容がとても面白く、説明も分かりやすく聞いていて楽しかった。
- ・前期に受けた授業の中で、一番面白かった。
- ・身近なことに関連づけるだけで記憶の残り方がこれほど違うということに驚いた。
- ・どうすれば適応的に生き残ることができるのか、より深く考えられるようになった。
- ・ティーチャーシップに感銘を受けた。全ての授業がとても面白かった。

- ・今後も是非このスタイルで授業を続けてほしい。
- ・講義を通してこの分野で研究してみたいという気持ちが強まった。

など、すべての学生が肯定的に授業を評価していた。

これらの結果から判断して、理念で掲げている（１）学生が授業を積極的・主体的に受ける環境を整える、（２）授業を通じて当該分野の基礎知識と研究の意義を理解してもらう、という目標はある程度達成されているものと判断している。

5.1.2. 研究室に所属される学生の増加

研究室への所属を希望した学生に、理由を尋ねてみた所、私が着任時にすでに佐賀大学に所属していた学生はほぼすべてが私の授業を受講して当該分野に興味を持ったと答えていた。このことも、教育目標を達成するための授業を実践できている証左であろうと考えている。

実際、私の着任前の５年間に当分野に所属された学生は合計 10 名（平均 2.0 名／年）であったが、着任後の５年間では 23 名（平均 4.6 名／年；注：分属上限は 5 名）と倍増しており、近年は推薦入試と 3 年次編入学試験で希望して入学して来た学生や、他大学を卒業して大学院に進学して来た学生、佐賀大学の他学科を卒業して修士課程に進学した学生、入学後、当分野への分属を希望して 2 年次から転学科してきた学生もおり、研究室の活性化や裾野を広げる活動が少しずつ実を結んでいると感じている。

5.2. 研究室に所属する学生に対する教育の成果と評価

5.2.1. 学会発表と論文発表

学生による学会発表の回数は、2011 年度（半年間）6 回、2012 年度 20 回、2013 年度 16 回、2014 年度 18 回、2015 年度 24 回とコンスタントに 20 回前後をキープしており、今年度は着任後初めて、修士課程の学生が海外で開催される国際会議で発表することになった（添付資料 6）。

また、学生による成果の学術雑誌への発表も年々増えて来ており、研究室所属学生（卒業後も含む）が第 1 著者での論文は、2012 年 2 本、2013 年に 1 本、2014 年 5 本、2015 年 4 本、2016 年（7 月末まで）5 本と増加傾向にある（添付資料 7）。

5.2.2. 学生の受賞およびプレスリリース

2011 年には第 43 回種生物学会ポスター賞、2012 年には鹿児島大学連合農学研究科最優秀賞、第 5 回東アジア生態学会大会ポスター賞、第 44 回種生物学会ポスター賞、2013 年には第 45 回種生物学会ポスター賞、2014 年には第 58 回日本応用動物昆虫学会大会ポスター賞、2015 年には第 59 回日本応用動物昆虫学会大会ポスター賞、佐賀大学農学部同窓会表彰、2016 年には日本昆虫学会第 76 回大会・第 60 回日本応用動物昆虫学会大会合同大会ポスター賞と、これまでに毎年、学生による活動が表彰されている。

また、2015 年 12 月には、学部 3 年生 2 名が取り組んだ研究成果をプレスリリースさせ、新聞各紙や NHK ニュース、大学広報誌「かちがらす」などで取り上げてもらった（添付資料 8）。

5.2.3. 卒業した学生との交流

私が着任した卒業した学生は、その後もしばしば研究室を尋ねて来ており、いまでも活発な交流が続いている（表紙写真参照；着任後はじめて分属してきた5名の卒業時の写真と、それを2年4ヶ月後の来訪時に再現した写真）。このことは、社会に出た後も卒業生が大学や研究室に親しみを持って来ており、大学で受けた教育に満足してくれている証であろうと考えている。そして、今後も卒業生たちが有意義な人生を送る上で様々なサポートをしていきたい。

6. 今後の目標

6.1. 短期的目標

今後4年間のうちに、以下の目標を達成したい。

(1) 授業評価アンケートの全項目が学部および全体平均を上回る。

現在は授業時間外の学習時間とシラバスの活用割合が平均を下回っているので改善したい。

(2) 研究室への分属者数平均4名以上を維持し、大学院進学率を5割以上に高める。

過去4年の大学院進学率は42%（8名/19名）をさらに高める努力をしていきたい。

(3) 内部進学者の中から博士課程まで進学する学生を1名以上輩出する。

過去4年間のうち、博士課程への進学者はすべて外部から修士課程および博士課程を受験した学生であるため今後は内部からの進学者も輩出したい。

(4) 学部学生の50%以上、修士課程の学生全員が、在学中に英文原著論文を投稿する。

現在は、卒業論文や修士論文執筆後、その一部を卒業・修了後に投稿しているが、成果が極力在学中に挙がるように配慮したい。

(6) 日本学術振興会特別研究員PDを研究室で1名以上受け入れる。

これまででは申請者が1名（不採択）しか実績がないが、アクティビティが高いポストドクの実在は研究室をより活性化するものと考えており、是非採択者を受け入れたい。

6.2. 長期的目標

将来的な目標として、私はこの研究室を、学生あたりの学会発表数や執筆論文数の観点から、世界でもっとも生態学や昆虫学に関する研究が盛んな研究室にしたいと考えている。そして、国内外の当該分野を志す学生が、是非この研究室に進学したいと思えるような場所にしていきたい。

学部卒や修士卒の学生に関しては、出身研究室を見ただけで、「あの研究室出身の学生なら間違いなし」と民間企業から言ってもらえるような人材を輩出し続けて行きたいと考えている。

博士卒の学生に関しては、当該分野の世界的なトップリーダーとなり、学問の発展を牽引できる人材を育てて行きたい。そのためには、私が彼らにとっての超え難い壁であり続けるとともに、その壁を乗り越え得る研究遂行能力とリーダーシップを在籍中に身に付けさせなければならないと考えている。